

Ⅲ. アクティヴ・ラーニングの普及

1. 専門教育における実践事例の共有

1-1. AP シンポジウム（アクティブ・ラーニング）

1) 概要

本シンポジウムは、初年次教育プログラム「SIH 道場」で導入されたアクティブ・ラーニングの取り組みを、学士課程全般に浸透させていくことを目指して実施された。また、本年度のシンポジウムは議論のさらなる深まりを狙って、徳島県下の FD ネットワーク（T-SPOD）加盟校における FD 活動の成果と教育実践の先駆的な取り組みを共有することを目指し、同じく「アクティブ・ラーニング」をテーマとしている、「大学教育カンファレンス in 徳島」ラウンドテーブルと合同で実施した。シンポジウムでは、徳島大学総合教育センター教育改革推進部門助教の川瀬和也が司会を務め、徳島大学ソシオ・アーツ・アンド・サイエンス研究部准教授の行實鉄平氏、同准教授の小田切康彦氏、同医歯薬学研究部准教授の岡久玲子氏、ならびに T-SPOD 加盟校である阿南工業高等専門学校創造技術工学科教授の坪井泰士氏の 4 名による話題提供の後、会場を交えたディスカッションを実施した。

以下ではまず、プログラムの主旨と各提題者による提題の内容を記すことでプログラムの詳細を示し、その後、実際に行われたシンポジウムの様子を報告する。

2) プログラムの詳細

2.1) 本シンポジウムの主旨

アクティブ・ラーニングは、大学における伝統的な教授方法であった、一方向的な講義による知識伝達に代わる教授方法として注目を集めている。徳島大学は、文部科学省が推進する「大学教育再生加速プログラム（AP）」のうち、テーマ I「アクティブ・ラーニング」の取り組みに選定され、「学生と教員が共に成長する「SIH 道場—アクティブ・ラーニング入門—」」を軸に、アクティブ・ラーニングの手法を用いた教育の推進を行っている。本学の AP の取り組みは、「鉄は熱いうちに打て」（SIH：Strike while the Iron is Hot）の精神に則り、反転授業、グループワーク、学修ポートフォリオ、専門領域早期体験等によるリフレクションを基盤としたアクティブ・ラーニングの体験を通して、学生と教員が共に学び合い成長する教育プログラムである「SIH 道場—アクティブ・ラーニング入門—」を、初年次に導入するとともに、学年進行に伴い、アクティブ・ラーニングの実質化を学士課程全般に浸透させていくというものである。本シンポジウムは、AP の取り組みの一環として、本年度より初年次教育プログラムとして導入された「SIH 道場」でのアクティブ・ラーニングの実践を専門教育にも波及・浸透させることを目的としている。

また、本シンポジウムは、T-SPOD ラウンドテーブルと合同で実施される。T-SPOD ラウンドテーブルは、徳島県下の FD ネットワーク（T-SPOD）加盟校における FD 活動の成果と教育実践の先駆的な取り組みを共有し、高等教育の質的向上に向けた努力の成果を確認するためのものである。今回は、ラウンドテーブルのテーマを「アクティブ・ラーニングの取り組み」とし、本学 AP と目的が一致していることから、合同で実施する。

一口に「アクティブ・ラーニング」と言っても、そこには様々な教授・学習方法が含まれる。

徳島大学では、アクティブ・ラーニングを「教員による一方向的な知識伝達とは異なり、課題演習、質疑応答、振り返り、グループワーク、ディスカッション、プレゼンテーション等を取り入れることにより、学生自らが考え抜くことを教員が促し、学生の能動的な学習を促進させる双方向の教授・学修のこと」と定義し、その導入を推進している。このような多様な教授・学修方法を含むアクティブ・ラーニングを実際に授業に取り入れるためには、他の教員の実践を知り、その成果を共有し、またそれをもとに、各教員が自らの授業においてどのような形での実践が可能かを考え、相互に意見を交換することが重要である。

以上の観点から、AP シンポジウムとラウンドテーブルでは、徳島大学より 3 名、また T-SPOD 加盟校の阿南工業高等専門学校より 1 名の教員が提題者となり、授業実践の事例を発表することとする。また、この発表をもとに、意見交換を行う。これを通じて、「自分の授業にアクティブ・ラーニングを取り入れるにはどうすればよいか？」という観点から、フロアも含めた参加者一人一人が、発表された事例について考えられるようなシンポジウムを実施したい。

以下では、徳島大学に所属する 2 名の教員の提題内容について、簡単に紹介する。なお、T-SPOD より参加した坪井泰士氏の提題は、講義 VTR の事前視聴を踏まえたアクティブ・ラーニングの成果および具体的な実施方法に関するものであった。

2.2) プロサッカーチームを活用した実践事例

(徳島大学大学院ソシオ・アーツ・アンド・サイエンス研究部 行實鉄平)

本授業は、プロサッカーチーム（徳島ヴォルティス）での体験学習（試合運営サポート活動）を通して「前に踏み出す力」「考え抜く力」「チームで働く力」を養うことを目的としたもので、今回、その学習をより深く確実なものにしていくために、e ラーニングやルーブリックといった学習ツールの活用やアクティブ・ラーニングの観点を意識した授業展開に挑戦した実践事例である。

本授業の履修者は、人文科学系学生 28 名（1 年生 15 名、3 年生 13 名）。体験学習は、チームの試合運営サポート活動を 8 グループ（3～4 人）に分かれて 3 段階構成（①ホップ：業務内容を知る、②ステップ：接客対応を知る、③ジャンプ：企画運営にチャレンジする）で実施した。また、この体験活動の前後には、教員やチームスタッフが体験学習の充実およびリフレクション時の概念化に必要な内容に関する講義を行った。さらに、②と③の間にはグループワークやプレゼンの機会を取り入れ、学生同士の共同学習を促した。

2.3) アクティブ・ラーニングを通じた政策コンペティションの実践

(徳島大学大学院ソシオ・アーツ・アンド・サイエンス研究部 小田切康彦)

本報告は、徳島大学総合科学部の専門科目「公共政策学 I」において導入したコンペティション授業について取り上げる。当授業は、社会問題の解決策である公共政策の実態について理解することを目的としたものである。この授業の中で、受講学生がコンペを通じて実際に徳島県へ政策提言を行うという取り組みを実施した。具体的には、まず、受講学生のグループ分けを行い、徳島県が意見募集を行った県の総合計画・ビジョン案について検討した。続いて、グループごと

に意見の発表を行い、全体で共有した。そして、提案された意見の中から実現可能性のあるものを抽出し、政策提言として県へ提出した。このコンペは、討議を通じて実際の社会とのつながりを体験するものであり、受講学生の授業へのモチベーション、内容理解の向上等に寄与したと考えられる。

2.4) 職場巡視体験演習を通した看護大学生の学び

(徳島大学大学院医歯薬学研究部 岡久玲子)

看護学専攻3年生を対象とした専門科目『産業保健・看護論』の「職場巡視」の単元において、講義とその後のグループ体験演習を組み合わせた授業を実施し、学生の学びについて検討したので報告する。本単元の到達目標は、「職場巡視」の意義・目的、方法について理解することであり、まず、講義形式で、「職場巡視」の意義・目的および方法について教授し(1コマ60分、事例活用)、翌週、グループによる職場巡視体験演習を行った。学生はグループごとに指定された場所(学内)で職場巡視を行い、よい点はどこか、安全・衛生等に問題はないか、ポイントを話し合いながら記録用紙にメモをとった。その後、教室に戻り、各グループの代表者が気づいた点を発表し、教員は、一つひとつの発表ごとにフィードバックを行った(手順の説明5分、職場巡視25分、記録の整理・発表者の確定10分、学生による発表20分)。グループごとに異なる気づきがあり、全体で共有することで、多角的視点から見ることや他者の多様な感じ方から学ぶ姿勢を醸成した。また、講義の後に体験学習させることで、学んだ知識に基づき主体的に考え、理解を深めることができたと考える。

3) 当日のディスカッション

当日は、意見交換を促進するため、ある程度構造化された仕方でのディスカッションを実施した。まず、各発表者の提題に先立って、有益だと感じたこと、印象に残ったこと(!: Exclamation)と、疑問に思ったこと(? : Question)を書き留めるための「EQメモシート」をフロアの参加者全員に配布した。また、フロアの参加者に画用紙とマーカーを配布し、特に質問したいことを画用紙に書き出してもらうようにした。その後、この画用紙を会場前方の黒板上で分類・整理して、これらをもとにディスカッションを行った。

ディスカッションにおいては、アクティブ・ラーニング型授業において目標設定と評価をどのように効果的に実施するか、準備にかかるコストと学生の学習効果との関係という意味でのコスト・パフォーマンスをどう考えるか、予習・復習時間を確保するためにはどのような工夫が必要か、学外の機関と連携した取り組みの際にはどのような工夫が必要か等の点についての意見交換がなされた。

評価方法については、学生による相互評価の質をどのように保証するかという点が問題になった。これについては、ルーブリックを活用することで一定の客観性を担保するといった対策が共有された。しかし、客観性を高めたとしても、成績評価の際には学生間に利益相反が発生する可能性があるため、より慎重な運用が必要であることも指摘された。

今回のシンポジウムの提題は、プロサッカーチームとの連携、実際のパブリックコメントの送付、病院での実習といった、教室内にとどまらない学内外の組織との連携を含むものが多数あっ

たため、連携に関する議論は実り多いものとなった。こうした授業方法は、実際の社会とのかかわりを持たせることで学生が将来像を描きやすくなるほか、授業の取り組みへの動機づけが向上する効果が期待される。しかし一方で、教員は調整等の負担を強いられることにもなるとの意見もあった。

4) まとめ

シンポジウムは盛会であり、アクティブ・ラーニング型授業を普及させるための取り組みとして一定の成功を収めた。4人の教員による多彩な取り組みが報告されたことで、様々な背景をもつフロア参加者にとっても得るところの多いシンポジウムとなった。また、一部構造化されたディスカッションも功を奏し、意見交換が促進された。

さらなるアクティブ・ラーニングの普及支援のためには、シンポジウム場でなされた議論を、日常の教育活動支援へと還流させてゆくことが重要である。ディスカッションの中で、相互評価の問題点については、相互評価は直接の成績評価に用いるのではなく、学期途中で学生にフィードバックを与えてその後の学修の方向付けをするための形成的評価として位置づけることが有用であるように思われる。こういった点を踏まえて、単にルーブリック案の提供や作成支援だけでなく、活用方法にまで踏み込んだ支援も有効となろう。また、高い学習効果の実現とその準備のための負担とのバランスの問題を解決するため、特に学習効果が高いと思われる取組について、負担軽減のために重点的に支援してゆくような仕組みを構築してゆくことも有効であるように思われる。

1-2. AP シンポジウム（反転授業）

1) 報告概要

2016年1月6日に開催された「大学教育カンファレンス in 徳島」の中の「AP シンポジウム」の一環として反転授業の実践に関するワークショップをおこなった。本ワークショップは、参加者と発表者の間で、活発な議論が繰り広げられた。ワークショップの開催によって、参加者間で反転授業に関する重要な知見が共有され、新たな実践の開始に資するものと考えられる。

2) ディスカッションのまとめ

2016年1月6日、「AP シンポジウム」の中で『「反転授業」をやってみたー2014年からの実践を通してー』のセッションを開いた。本セッションには、約50名の参加者があった。本セッションでは、参加者と本学で反転授業を実践した教員6名が一丸となって議論を進めた。

『「反転授業」をやってみたー2014年からの実践を通してー』のセッションは、ワークショップ形式で進めた。本ワークショップでは、まず、趣旨説明をおこなった。趣旨説明は、2014年度の反転授業の実践のアウトラインについての概要を示した。また、反転授業の実践を、参加者に呼びかけた。

次に、反転授業に取り組んだ6名の教員によるポスター形式の発表をおこなった。実践の報告を、ポスター形式とすることで、参加者は実践した教員に直接疑問をおこなうことができた。参加者は、各発表者の実践報告に熱心に耳を傾け、活発な議論をおこなった。本セッションの参加者から集めたアンケートによると、ポスターによる発表から、「反転授業の理解が深まるとともに、対面授業の種々な取りくみがわかりました。」「いくつかのタイプの実例について、実施的な部分を知ることができ、参考になりました。」等の意見があった。

ポスター発表の後、発表した6名の教員を中心に参加者を交えた全体討議、パネルディスカッションをおこなった。パネルディスカッションの最初に質問票による質問を集め、フロアからの質問に答える形でパネルディスカッションを進めた。幾つかの質問が集まった。「事前準備は何をしたか?」という質問に対しては、「ビデオ20分程度+自前のテキスト」「ビデオは無しで自前の資料+クイズ」「小レポート」など、実践した教員から多様なコンテンツを用意し、対面授業に望んだことが報告された。また、「学生は本当に事前学習をしてくるのか? してこない学生への対応は?」という質問に対しては、予想以上の学生(8割~ほぼ全員)が事前学習をしてくることが明らかにされた。しかし、併せて、事前学習をしてくる学生がゼロになることもないので、授業中にTAがフォローする、本人任せ(大人の対応をする、やってこなくて困るのは学生自身)といった意見も出された。さらに、反転授業の効果に関する質問が寄せられた。現状では、反転授業の実践の普及が注目される段階だといえるが、今後、学習の質が問われることになるという意見が出された。学習の質に対する疑問に答えるため、評価方法の検討と開発を進める必要があることが、参加者全体で共有された。

なお、当日の本セッションの様子は、以下のWebサイトでも公開している。

<http://uls01.ulc.tokushima-u.ac.jp/info/Flipped/case/workshop2015.html>

2. アクティブ・ラーニング調査報告

2-1. アクティブ・ラーニング学内調査

アクティブ・ラーニングを個々の教員の専門科目に普及していくために、さまざまな専門分野におけるアクティブ・ラーニングの取り組みを調査し、教員間で共有できる仕組みの構築を行うことを目的としている。平成27年度は、学内の27事例を収集し、授業事例カードとしてまとめた。

1) 学生の学習を促進する授業事例カード リスト

学生の学習を促進する授業事例カードリスト

2016年2月4日現在

| No | 分野 | 事例名 | 教育的意図 | 所要時間 (分) | クラスサイズ | 担当教員 | | | 授業名 |
|--------|--------------------------|---------------------------|--------------|-------------|--------|-------|--------|----------|-----------------|
| | | | | | | 氏名 | 大学 | 所属 | |
| SCM-00 | 理学 <small>(自然科学)</small> | 小道具や学生とのやり取りで注意喚起する | 注意喚起・動機づけ | 0 | 中 | 古屋 玲 | 徳島大学 | 教育教育院 | 現代天文学への招待 |
| SCM-10 | 理学 <small>(自然科学)</small> | レクチャーとペアによる教え合い・学び合い | 理解促進 | 15~25 | 中 | 榎原 龍久 | 徳島工業大学 | 教育教育院 | 微分積分1,2・線形代数1,2 |
| SCM-11 | 理学 <small>(自然科学)</small> | レポートの質を高めるためのひと工夫 | 理解促進 | 15 | 中 | 古屋 玲 | 徳島大学 | 教育教育院 | 現代天文学への招待 |
| SCM-20 | 理学 <small>(自然科学)</small> | ミニ実験を含めた理論解説 | 動機づけ | 25 | 中 | 渡部 稔 | 徳島大学 | 教育教育院 | 基礎生物学 |
| SCM-30 | 理学 <small>(自然科学)</small> | 演示実験を含めた理論解説 | 動機づけ | 35 | 中 | 渡部 稔 | 徳島大学 | 教育教育院 | 基礎生物学 |
| SCL-00 | 理学 <small>(自然科学)</small> | 実物を用いて複眼的な理解を促進する | 動機づけ・理解促進 | 3 | 大 | 佐藤高則 | 徳島大学 | 総合科学部 | ミルクの科学 |
| SCL-20 | 理学 <small>(自然科学)</small> | ペア・グループによる課題演習 | 理解促進・動機づけ | 25 | 大 | 佐藤高則 | 徳島大学 | 総合科学部 | 環境とバイオテクノロジー |
| ENS-00 | 工学 | 授業内容に関連する実物を見せる | 注意喚起・動機づけ | 2 | 小 | 岡本 敏弘 | 徳島大学 | 工学部 | 光デバイス |
| ENS-10 | 工学 | 授業の冒頭で実施する小テスト | 理解促進・予習促進 | 16 | 小 | 岡本 敏弘 | 徳島大学 | 工学部 | 光デバイス |
| ENM-10 | 工学 | 授業の冒頭で予習ノートをチェックする | 予習促進・理解促進 | 10 | 中 | 水科晴樹 | 徳島大学 | 工学部 | 電子回路 |
| ENM-50 | 工学 | 学生の板書する解答を活用した演習科目 | 理解促進・予習促進 | 80 | 中 | 吉田 健 | 徳島大学 | 工学部 | 物質機能化学演習 |
| ENL-10 | 工学 | 授業の最後に実施する課題演習 | 知識定着 | 15~20 | 大 | 西出 俊 | 徳島大学 | 工学部 | グラフ理論 |
| ENL-30 | 工学 | 反転授業 (知識定着のための課題演習) | 知識定着・予習促進 | 40 | 大 | 森賀俊広 | 徳島大学 | 工学部 | 材料物性 |
| SOS-00 | 社会科学 | 予習シートの事前配布と小テスト | 予習促進 | 5 | 小 | 吉田 博 | 徳島大学 | 総合教育センター | 大学教育と学び方入門 |
| SOS-20 | 社会科学 | パネルディスカッション | 複眼的思考促進 | 20~40 | 小 | 吉田 博 | 徳島大学 | 総合教育センター | 大学教育と学び方入門 |
| SOS-21 | 社会科学 | マイクロレポート | 複眼的思考促進 | 25 | 小 | 小田切康彦 | 徳島大学 | 総合科学部 | 公共政策学Ⅱ |
| SOM-30 | 社会科学 | マインドマップを用いた概念の整理 | 理解促進・振り返り | 30 | 中 | 小田切康彦 | 徳島大学 | 総合科学部 | 公共政策学Ⅰ |
| SOM-90 | 社会科学 | グループワーク・プレゼン | 複眼的思考促進・理解促進 | 30+90 | 中 | 小田切康彦 | 徳島大学 | 総合科学部 | 公共政策学Ⅰ |
| SOL-00 | 社会科学 | 大福帳による振り返り | 振り返り・動機づけ | 5 | 大 | 金西計英 | 徳島大学 | 総合教育センター | 情報メディアと教育 |
| SOL-50 | 社会科学 | スモールグループディスカッション | 複眼的思考促進 | 60 | 大 | 土屋 敦 | 徳島大学 | 総合科学部 | 生命倫理と現代社会Ⅰ |
| SOL-51 | 社会科学 | 反転授業・プレゼン・ディスカッション | 複眼的思考促進・予習促進 | 70 | 大 | 金西計英 | 徳島大学 | 総合教育センター | 情報メディアと教育 |
| MES-10 | 医療 | 予習課題を学生に説明させる | 理解促進・予習促進 | 10 | 小 | 櫻井信之 | 徳島大学 | 総合科学部 | 基礎物理学実験 |
| MEM-10 | 医療 | 事例について学生同士で話し合う | 理解促進 | 18 | 中 | 橋本浩子 | 徳島大学 | 医学部 | 小児援助論 |
| MEM-50 | 医療 | グループで体験学習を行う | 理解促進・複眼的思考促進 | 60 | 中 | 岡久玲子 | 徳島大学 | 医学部 | 産業保健・看護論 |
| MEM-51 | 医療 | TBL (Team Based Learning) | 理解促進・予習促進 | 60 | 中 | 大倉一夫 | 徳島大学 | 歯学部 | 歯科補綴学(2)A |
| MEL-00 | 医療 | 予習課題のミニプレゼンテーション | 理解促進 | 3~5 | 大 | 米村重信 | 徳島大学 | 医学部 | 基礎生物学 |
| LAM-50 | 語学 | グループで予習課題を話し合わせる | 理解促進・予習促進 | 55 | 中 | 服部恒太 | 徳島大学 | 総合科学部 | 主題別英語 |

2) 学生の学習を促進する授業事例カード 例

| ◆反転授業 (知識定着のための課題演習) | | 事例No.ENL-02 |
|--------------------------------|---|-------------|
| 徳島大学 工学部 森賀俊広 教員 工学部専門科目「材料物性」 | | |
| 目的 教育的意図 | ◆Key Words < 理解促進 > 基礎知識を確実に習得するために、講義はいつでも何度でも視聴できるようにeラーニング化しておき、 授業時間内では演習問題や発展的な内容 を取扱い、 学生の理解を促進する。 | |
| 概要 | 講義内容をビデオに録画 (20分~25分) し、moodleを用いて履修学生に提供する。 学生は、事前にビデオ教材で講義部分を受講し、関連内容の演習課題を解き、それから対面授業に臨む。 対面授業では、演習課題と同じ内容の 小テスト を実施したり、さらに 発展的な内容 を取り扱ったりなど、講義以外の方法で学生の定着を図る。今回の事例では、授業の冒頭で、小テスト (課題演習) を8分、その解説を30分実施し、その後次の授業に関するレクチャーを実施した。 | |
| 分野 | 工学系 (他分野でも応用可能) | |
| クラスサイズ | 大(70名以上) | |
| 所要時間 | 学生が事前にビデオ教材で講義を受けているという前提で、90分間授業をデザインする。 | |
| 学生の事前学習 | 講義ビデオの視聴：約20~25分、演習課題の解答：約10分 | |
| 評価方法 | なし | |
| 準備物 | 講義ビデオ、小テスト ※講義ビデオは、前年度の授業を撮影した映像を使用しており、編集やMoodleへの掲載はeラーニングサポート室の協力を得ているため、 実質的な負担はない。 | |
| 実施のポイント | ◆学生がビデオ教材で講義部分を受けてから授業に臨むため、授業内では知識を定着させるための演習時間を確保することができる。そのため、演習課題を多くしたり、丁寧に解説したりすることができる。 ◆学生は、講義部分をいつでも、何度でも自分のペースに合わせて受けることができる。 | |
| 学生の反応 | 受講学生から、次のような意見が挙げられた。 ○ビデオ教材は、いつでも見返すことができるため、試験前などにも役に立つ。 ○毎回の授業の冒頭で、課題演習 (小テスト) を行うため、授業に参加するという気持ちの切り替えができる。 | |

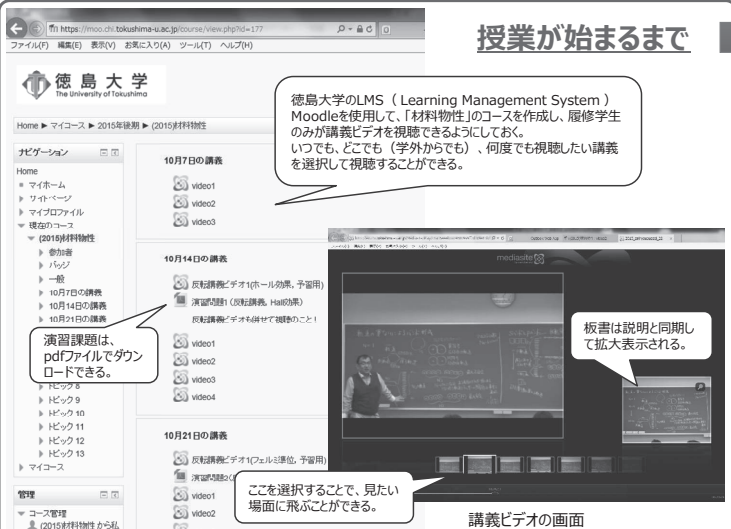
◆反転授業 (知識定着のための課題演習)

講義内容を20~25分程度のビデオに録画し、moodleを用いて履修学生に提供する。**学生は、事前に講義ビデオを視聴し、演習課題を解いておく。**ここまでの**授業外学習を行ってから対面授業に臨む。**

対面授業では、演習課題と同じ内容の小テストを実施したり、関連する発展的な内容を取り扱ったりすることができる。学生は、**重要な部分を繰り返し学習することで内容をより理解し、知識の定着に繋がる。**

今回の事例では、授業の冒頭で小テスト (課題演習) を8分、その解説を30分実施した。

授業が始まるまで



徳島大学のLMS (Learning Management System) Moodleを使用して、「材料物性」のコースを作成し、履修学生のみが講義ビデオを視聴できるようにしておく。いつでも、どこでも (学外からでも)、何度でも視聴したい講義を選択して視聴することができる。

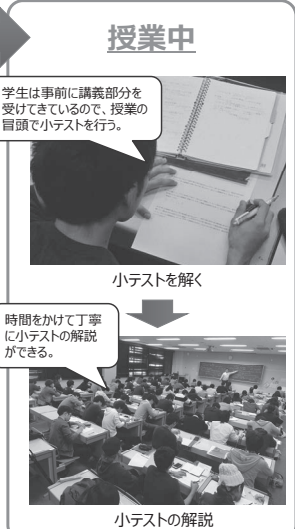
演習課題は、pdfファイルでダウンロードできる。

ここを選択することで、見たい場面に飛び込める。

講義ビデオの画面

板書は説明と同期して拡大表示される。

授業中



学生は事前に講義部分を受けてきているので、授業の冒頭で小テストを行う。

小テストを解く

時間をかけて丁寧に小テストの解説ができる。

小テストの解説

2-2. アクティブ・ラーニング学外調査：関西大学訪問調査報告

日時：平成 28 年 1 月 14 日（木）13：00～15：00

場所：関西大学千里山キャンパス

訪問者：吉田博（総合教育センター講師）、久保田祐歌（総合教育センター特任助教）

対応者：森朋子氏（教育推進部准教授）、山田嘉徳氏（教育推進部特別任用助教）、竹中喜一氏（教育開発支援センター事務局）

1) 調査目的

ラーニングスキルの習得を目的としたアクティブ・ラーニング型初年次教育の実地調査を行い、授業体系、授業運営、教材、学修評価等の概要を把握し、SIH 道場の授業設計に反映するために、関西大学への訪問調査を行った。関西大学は、平成 26 年度大学教育再生加速プログラムのテーマⅠ（アクティブ・ラーニング）、テーマⅡ（学修成果の可視化）の複合型で採択されている。アクティブ・ラーニングを推進する上では、学修成果の評価方法についても先進的取組を参考にする必要があるため、複合型で採択されている関西大学を訪問調査の対象とした。

2) テーマⅠ「アクティブ・ラーニング」に関する取組

テーマⅠでは、生涯に亘って創造的な思考と責任ある行動を実践し続ける考動人<Lifelong Active Learner>を育成することを目的とした事業が展開されている。「考動力」とは、「自ら考え行動する力」のことであり、考動力育成のために正課内外でのプログラムが企画・実施されている。正課内としては、共通教育科目の基盤科目群（大学での学びに必要なスキルの修得を目的とした科目群）の選択科目「スタディスキルゼミ（各テーマ）」において、平成 27 年度から、「交渉学入門」および「クリティカルシンキング」が開講されている（「交渉学入門」については、テキスト教材が開発されている）。これらの科目においては、アクティブ・ラーニング型授業においては学習支援を行う「LA（ラーニング・アシスタント）」が導入されている。平成 21 年度から LA 制度が開始され（平成 27 年度は 100 名以上が活動）、専門科目も含む授業（平成 27 年度は 85 クラスで活用）でも活用されることで、アクティブ・ラーニングが推進されている。初年次科目で LA を希望する教員のクラスに 1 名以上で入り、グループワーク等のファシリテーションを行い、授業後にはリフレクション・ペーパーに記入することで振り返りを行っている。LA となるのは、1 年生～4 年生までの幅広い学生である。学期前の 3 月、9 月には LA の研修や合宿研修が実施され、こうした研修の企画・運営は、教育開発支援センターの教員が担当している。加えて、LA の自主企画によるワークショップも開催されている。

「交渉学入門」においては、学生がリーダーシップを身につけることを目標の一つとしており、学生は交渉学を学ぶことで企画ができるようになるため、LA の育成の機会となっている。

3) テーマⅡ「学修成果の可視化」に関する取組

テーマⅡでは、「考動力」を直接、間接で評価するための取組が展開されている。平成 26 年度から「教学 IR プロジェクト」を発足させ、間接評価については、学修行動調査と学修到達度調査が計画されている。平成 27 年度に入学時調査が実施され、3 年後には卒業生調査が控えており、その間の 1 年次後期、2 年次、3 年次にはパネル調査も計画に位置づけられ、試行的に実施されている。調査により期待できる効果は、成績と紐づけすることで入試結果との関連の分析ができ、エンロールマネジメントに繋げられることである。直接評価としては、その手法の一つとしてルーブリックの活用が推進されている。教育開発支援センター所属の教員が、一般的に科目やクラス単位で個別に用いられる「クラスルーブリック」等の作成を行い、学内教員に提供している。また、考動力のコモンルーブリックの作成も行っている。クラスルーブリックについては、教員のニーズを聴き、提供後には使用した感想もインタビューを行い改善につなげている（平成 26 年度のルーブリック作成の要望は 11 件）。提供したルーブリックは、教員が初めてルーブリックを導入する場合はそのまま使用されるが、一部改訂されたり、記述語を一緒に作成することもあるとのことである。その他、全科目横断的に使用するルーブリックもある。平成 27 年度には初年次教育科目担当の教員を対象とするアンケートが実施され、ルーブリックの活用実態に関する調査も行われている。

4) おわりに

関西大学では、平成 26 年度大学教育再生加速プログラムの採択以前の、平成 21 年度大学教育・学生支援推進事業【テーマ A】大学教育推進プログラムに、「三者協働型アクティブ・ラーニングの展開」の取組で採択されており、LA の育成や活用が学内的に定着していることがアクティブ・ラーニング型授業の推進に繋がっていることがうかがえた。

3. FDプログラムの開発

1) 概要

アクティブ・ラーニングを普及させるための効果的なFDプログラムを開発するため、本年度は、「Learning, Education, Development (LED) カフェ」と題して、自由な意見交換を基調としたFDを試行した。以下では、その背景、実施方法、ならびに成果の報告を行う。

2) 背景

アクティブ・ラーニングの普及という実質的な成果につなげるためには、しかし、単なるセミナーではないワークショップ型のFDプログラムが有効とされる。しかしワークショップ型のプログラムは、担当部局にとっても参加する教員にとって負担感が大きく、また参加者数や効果が頭打ちとなるという問題も抱えている。

そこで、これらの問題を解決するため、持続可能かつ気楽に参加できるFDプログラムを開発したいと考えた。開発にあたっては、科学コミュニケーションの分野で注目を集めている「サイエンスカフェ」にヒントを得て、参加者の自由な意見交換を基調とする新しいタイプのFDプログラムをめざした。

3) 実施方法

LED カフェは毎回、60分を基本として実施した。実施にあたっては、総合教育センター教育改革推進部門の教員が話題提供者となつて、10分程度の話題提供を行った。この話題提供を

| 回数 | 実施日 | テーマ |
|-----|-----------|----------------------|
| 第1回 | 9/29 | 学びを促すディスカッション |
| 第2回 | 10/27 | もっと学びを促すディスカッション |
| 第3回 | 11/24 | 講義形式の授業で学生を引き付ける |
| 第4回 | 1/26 | 大学教育の未来を考える |
| 第5回 | 2/23 (予定) | 事例に学ぶアクティブ・ラーニング (仮) |

踏まえて、その後の約50分間、参加者間の自由な意見交換を行うようにした。各回の話題提供のテーマは、表に示す。

本プログラムの実施にあたってモデルとしたサイエンスカフェにおいては、意見交換しやすい、和やかな雰囲気づくりが鍵とも言われている。本プログラムにおいても、徳島大学附属図書館本館に設置されている飲食可能スペースの「カフェテリア」を活用し、簡単な菓子や飲み物を参加者が持ち寄る仕組みとすることで、意見交換しやすい「カフェ」空間の創出をめざした。また、参加者を確保するため、インターネット上のグループウェア・サービスを活用した広報活動を行った。

4) 成果と課題

当初のねらい通り、実際の授業者の立場からの活発な意見交換を、和やかな雰囲気の中で行うことができ、プログラムは一定の成果を収めた。普段話題に上がることの少ない教育について、

改めて話し合う場を創出することができたと言える(写真は、第4回LEDカフェの様子)。

しかし、回を重ねるにつれて、参加者が固定化する傾向が見られたこと、また、第1回から第3回まで、個別の授業実践に関わる話題提供を繰り返し行ったため同じような議論に収束する場面が見られたことが、本プログラムの問題点として明らかになった。本プログラムを将来にわたって継続的に実施し、アクティブ・ラーニングの本格的な普及につな



げるためには、同じような議論が繰り返されることを防ぐための話題の選定や、参加者の輪をさらに大きく広げるための広報の工夫が必要になると考えられる。

